

# ヴィラール・ド・オヌクールの 画帖図柄の格子上分類配列

藤 本 康 雄

13 世紀フランス北部ピカルディー出身のヴィラール・ド・オヌクールが遺した画帖は、建築家自身の手になるゴシック建築に関する当時の手稿本でほとんど唯一最古・最大の貴重な史料として、パリの国立図書館に秘蔵されている<sup>1)</sup>。筆者は多年にわたり同画帖の研究に携わって来たものであるが、このほど画帖に描かれた全図柄の個々分別と主題別比較・再編成を、描画手法の解析を兼ねてローマ<sup>インチ</sup> 格子上で試みることを考えるに至った。ここにその全容を示し、関連する考察を加えたい。

## 1. 画帖図柄配列の実態

件の画帖は、使い古して黒ずんだ 33 葉の羊皮紙を綴じたものである。各葉の形・大きさも不揃いで、平均して縦が約 24cm、横が約 15.5cm、A4 判より少し小さい形状を示す。各葉の表裏にはさまざまな図柄が描かれ、それらの主題・内容は一部を除いて画帖の部分や図版において必ずしも脈絡がない(右図)。一画面一主題のものもあれば、人物図と動物図が混在したり、図柄の向きが異なったり、ときには天地が逆になっていたりする。そして各図柄間の空隙各処に、13 世紀ゴシック文字によるピカルディー語と一部ラテン語の、簡単な説明文が挿入されるがその表記も統一を欠く。やや纏まったものとして僅かに石工事・木工事等に関する内容の図柄が、横並びの欄を設けて記録されたり、ポルトレチュールとヴィラールが称する一連の図柄が、2 葉続いて示されるに留まっている。これら図版・図柄の内容を、たとえば最初の 5 葉について実態のまま羅列すると次のようである。図版 1. ペリカン、司教像、梟、踞った化物ほか

図版 2. ヴィラールの名乗り、12 使徒ほかの人物像

図版 3. 戦士、カタツムリ

図版 4. 十字架のキリスト

図版 5. 十字架の一部、壺様の図柄

図版 6. 傲慢、謙譲



▲ ヴィラール・ド・オヌクールの画帖第 1 葉表面 (図版 1)

- 図版 7. 熊, 白鳥, 天のエルサレム  
 図版 8. キリスト教会の勝利  
 図版 9. 永久運動の車輪, 同説明文  
 図版 10. 木の葉模様の顔, 唐草模様の迫石  
 (以下略)

このような雑然とした記録に至った事情については、幾つかの理由が考えられる。まず第1は作者のヴィラルが画帖を旅に携え心に適ったものを見て、随時随処にこれを描き留めたと見られることである。そして第2にヴィラルが、晩年に至り画帖を一種の伝書として徒弟の教科書に仕立てることを思いつき説明文を加え、二、三の後継者がこれに倣ったらしいことがある。第3に原本の後世改変が考えられる。1935年にヴィラル研究の定本ともいふべき一書をものしたR.H.ハーンローザーによれば、画帖は6折帳からなっているが、それらの一部に欠落や組み替えが見られるというのである<sup>(2)</sup>。画帖は時代を経るにつれて、少なくとも3人以上の所有者が変わり、最後はフランス大革命時にサン・ジェルマン・デ・プレ修道院のラテン文書の中に混じって発見されたという。この間に何らかの改変が加えられ、少なくとも30葉近くが失われたと考えられている。また一部図柄に書き込みや落書きが加えられたようである。

## 2. 図版・図柄分類整理の試み

画帖の発見後直ちに最初の注解書の発刊を志したJ.-B. A.ラシュスは、こうした一見雑然とした図柄内容について次のような分類を示している<sup>(3)</sup>。

- (1) 機械装置, (2) 測量術, (3) 石工事, (4) 木工事,  
 (5) 建築図面, (6) 装飾図面, (7) 人物像, (8) 動物画,  
 (9) ポルトレチュール, (10) その他

ハーンローザーも同様の分類整理を果たした<sup>(4)</sup>。

- (1) 建築図面, (2) 応用構築手法 (家具・道具類),  
 (3) 石工事と幾何学, (4) 木工事とエンジン, (5) 人物像,  
 (6) 動物画, (7) ポルトレチュール

さらに1959年アメリカのT. ボウイが図版のレベルで画帖を分別し、内容により同種のものを纏め、並べ替えることを試みた。その配列は次のようであり、画帖原本との照合が示されている<sup>(5)</sup>。

表紙見返し	運命の輪
p. 1,2	前文
3 ~13	キリスト、教会、聖職者
14~21	王侯、貴族、騎士、戦士
22~30	芸人、古代人、職人、闘士
31~34	レオ、動物
35~38	ポルトレチュール
39~50	建築図
51~54	家具
55~57	石工事
58~62	エンジン、木工事
63	その他

ここにおいて建築関連図、動物図等はよく纏められ、相互の比較がやや容易になったと見てよい。しかし、同一図版上でまったく種類の異なるものが含まれている場合、どちらを主にするかで問題が生じ、本来の部類から切り離されてしまうことになる。図の大きさやボウイの判断による重要度で配置を図ったと考えられるが、なお中途半端に終わることも否めないのである。なまじ図版の段階で原形の一部が遺されるため、却って混乱を招いているともいえよう。

そこで筆者は以前にボウイの考えをさらに進め、画帖の各図柄のレベルにまで下げて各図版を分断し、図柄の内容ごとに分類再編することに思い及んだ。当初の考えには、画帖図柄の全体を見渡し、どの図柄が原本のどこにあるかを知るための、図柄索引的な便宜も含まれた。原本各図版を約75%に縮小コピーし、これを切り分けて建築図、人物・動物図等を種別ごとに纏め並べたところ、800×1600mm大の用紙に全部を納めることができた。区分け欄の大きさは必ずしも整合しないが全図柄が一望でき、原本位置の照合が極めて容易となった。そして今回、これも筆者がかねて考察を進め実態を把握して来た、画帖図柄並びに図版全体の構成に見る基準寸法格子との対応という事象を、以上の分別に重ね合わせることを試みるに至ったものである。

## 3. 画帖図柄の格子図法構成

前述のポルトレチュールと称される一連の図柄は、略

画風のスケッチの中に三角形、正方形、星形、円等の簡単な幾何学図形を当て嵌めたものである。中に一つの正方形の4辺の各4等分点を結んで作る、16目方眼を含むものがある。その大きさに3種類あり、各辺が2ローマ吋、2カロリング吋、 $\sqrt{2}$ ローマ吋であること、そしてポルトレチュール図柄に含まれる幾何学図形すべてが、これらの中いずれかの方眼によって描かれたことを、これまでに明らかにし得た。筆者が中世各期教会堂の実測調査を含む平面構成の解析から当時の常用を推定して来た、古代ローマ尺(295mm)とその派生尺として $2\sqrt{3}$ 倍のカロリング尺(340mm)及び、 $\sqrt{2}$ 倍のいわばローマ<sup>か</sup>矩尺の各1/12をそれぞれの1吋とする寸法である<sup>(6)</sup>。

ポルトレチュール以外の図柄についても同様に、基準寸法格子による16目方眼への適合が見られ、ときに図版全体に及んで同じ格子構成が確かめられた<sup>(7)</sup>。一見恣意的に見える画帖の諸図柄が、かなり規則正しい寸法と図形構成を持つことが明らかになったのである。およそ図形を描くとき当然と思われる、こうした手法がこれまで顧みられなかった理由として、建築意匠造形分析に際して

の古典主義的比例理念の先行と、中世封建社会での尺度不均一説視点が考えられる。しかし、少なくとも工匠建築家は各地に同じ尺度を持ち歩き、これによって遠地にも共通する尺度構成の教会堂を建てたと思えるのである。ヴィラルールの画帖の場合、解析に際しこれら3種の尺度のどれがよりよく適合するかが問題であったが、今回はそれらの中でも比較的頻度の高いローマ尺に従って、これを共通の尺度として、あらためて全図柄ならびに図版の解析を行った。その結果ほとんどの場合について、然るべき適合が見られることになった。ローマ矩尺・吋やカロリング尺・吋を基準とする図柄も、派生尺としての補正の上で適合が確認できる。

そもそも中世の羊皮紙手稿本の残存例では、多くの場合極めて整然とした文字や図柄の配列が見られる。それらは写本描画に際しかなり正確な行の割りつけを行い、極めて細いインキ罫もしくは金属尖筆やへらでの押し線を引いて、紙面構成の基準とした結果であると認められる。例えばK.ワイツマンの示す古代記録の中世写本図版では、47例中26例までに明瞭な罫線の跡が残っている。それらについては罫線間隔の絶対寸法は不明である。しかしM.M.マニオンらによる中世絵入手稿本研究書では、紙面寸法構成が細部にわたって検証されている<sup>(8)</sup>。行線間隔は3, 4, 5, 6, 7, 9, 14, 24各mmといった数値があげられる。いずれも誤差を含め、1/8ローマ吋(3.07mm)の倍数の公算が高い。

また、1958年パリ国立図書館刊の“ビザンティンとフランス中世”と題する、中世手稿本展カタログがある。その図版16に、ビザンティンドーム屋根の並ぶ建物と組んで描かれたキリスト昇天図があつて、明瞭にへらによる格子線の一部が残って見える<sup>(9)</sup>。これを全体に及ぼして見ると、建物の壁頂やアーチ、ドームその他各部分の位置・大きさによく合致することがわかる。230×165mmという全体の大きさから割り出した格子線の間隔は、9.166mm、つまり3/8ローマ吋に近いと推定されるのである(左図)。

ヴィラルールの画帖では一部の円弧や直線を別にして、それとわかる基準線の痕跡は必ずしも明瞭に認められない。が、格子線を下敷きとしたやも知れず、白墨・木炭



羊皮紙手稿本格子線例(キリスト昇天図, 12世紀)

など消し易い筆具で線書きがなされたと考えられる。いずれにせよ何らかの基準寸法による物差しをもとに、コンパスやスケア（L型の直角定規で基準尺による部分寸法を持つ）を用いて作図したことは間違いなく、そのひとつの便法として16目方眼ないしはその拡張による、格子線を活用したことは十分想像されるのである。それはまたポルトレチュールの応用と考えられている拡大・縮小だけでなく、単純に画帖の図を模写するためにも有効であったと見られよう。

格子線を用いた建築図面作成法として、先駆的な明らかな例は古代エジプトにあった。S.コストフもその著「建築家—職能の歴史」の中でこれを示し、“外観の構成あるいは全体の組み立て方に内在する構成原理と関係するものであったとも考えられる”（大野秀敏訳）<sup>(10)</sup>としている。因みにコストフは同書で中世の建築図面ならびにヴィラールの画帖についても触れるが、図の寸法や格子図法について述べることはなく、尺度に関しては“よく言われることだが、中世の建築家が幾何学に頼っていたのは、一般的に通用する寸法の単位がなかったことに原因がある”（若月重敏訳）<sup>(11)</sup>と述べ、中世尺度不均一説視点によっている。

#### 4. 画帖図版の格子上配列における二、三の考察

以上の観点から画帖の全図柄を分別し、主題ごとに格子上に配列した試みを以下の写真版1～16に示す。

凡例としていえば、基準とする赤線の格子間隔は縦・横とも原寸で1ローマ吋、本稿の写真版ではその約1/4になっている。全図柄を、1)建築図面、2)建築部分、3)家具・道具、4)石工事、5)木工事、6)機械（エンジン）、7)ポルトレチュール、8)人物図、9)動物図の9グループに分けた。各グループごとに関連度に応じて纏め、その配列順は原則として原図版順に倣い、また大きいものから小さいものへと並べた。格子上には相互の寸法比較を兼ねて配置した。ここに図柄各部のローマ吋格子への適合が見てとれることになった。図の繁雑を避けるため記入はごく一部に留めたが、随所に1/2、 $\sqrt{2}/2$ 、2/2、3/2、4/2…各ローマ吋単位半径による円弧の下描き線も想定されるのである。

建築図面の中にラン大聖堂の西正面北口塔の見上げ図と、その中層部平面が示される。画帖原本ではこれが図版18と19に見開きに並ぶものの、別々に描かれている。両者を格子に乗せて上下に並べてみると、実に正確な対応を示すことが明らかになった。また、ラシュスの示す同じ塔部分の平面詳細図から部分の寸法を割り出して見ると、胴部正方形の1辺が8,300mmつまり28ローマ尺(8,260mm)と測れるのに対し、ヴィラールの図ではこれが3ローマ吋1/2つまり28/8ローマ吋で示される。明らかに原寸の1ローマ尺を、図では1/8ローマ吋で示す縮尺法によるものと見られ、筆者が以前に示したモーヤカンブレ大聖堂の場合などと同断である。

人物図に関して散見のままでは気づかれないが、これらを身長により幾つかのグループに分けることが可能である。ここでも何らかの縮尺意図が窺える。特にキリスト座像、王侯図、若者図などではそれぞれ別葉に描かれているが、腰かけの高さがほぼ共通して約2ローマ吋で示され、16ローマ吋くらいの実寸を想像させる。また、これらの人物図の曲線部について、中心点や半径が格子に合う円弧が基本になっている様子が見え、転写の便が想像できる。動物図でも同様である。

家具の中では長椅子袖脇装飾の簡単なものと複雑なもの2種類が別々に描かれるが、これらを並べて見ると両者の比はほぼ1:2になっていることがわかる。両方の装飾要素をなす唐草模様について格子との対応から、円弧法線を共有しつつ半径を変えながら1/4円弧を繋いで、渦巻き線にする手法が想定される。同様の手法は、ドラゴンSの飾り文字などにも窺える。

エンジンと称される機械装置のうち、自動鋸や時計仕掛けに、円形の車輪を斜め横から見て楕円で示してあるが、これらはいずれも長径を知って近似楕円を描く法によっていることが判明した。つまり長径を4等分し、各等分点を中心に同じ等分半径の円を3つ描き、中央円の直径の両側に立つ正三角形の各項点を中心とする楕円で両端の円弧を結ぶものである。法線を共有する二つの半径の異なる円弧は、接線として滑らかに連続することをヴィラールたちが心得ていたことを示すもので、ヴィラールが名乗りの文章の中で誇らし気に述べている、“幾何学

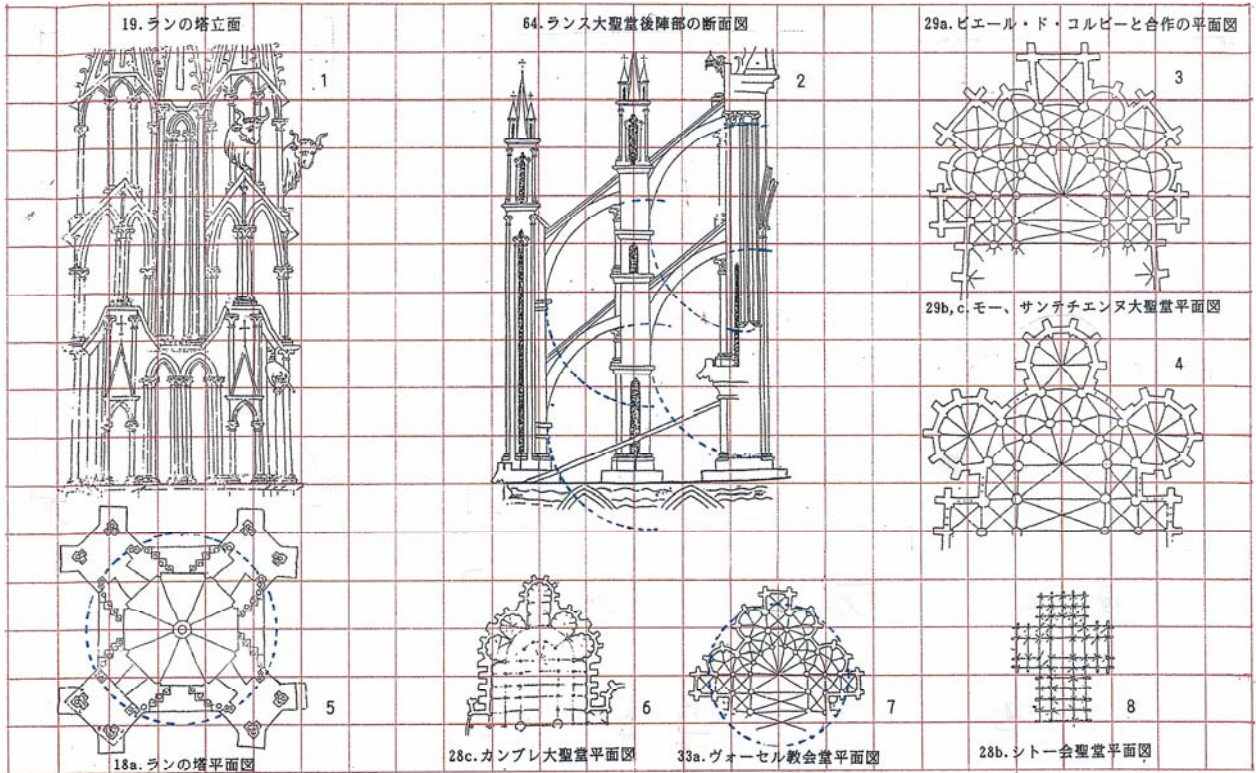


図1. 建築図面-その1 (各図は原図の約1/4, 1ローマ吋≒24.6mmの格子と破線円弧は藤本による。以下同じ。)

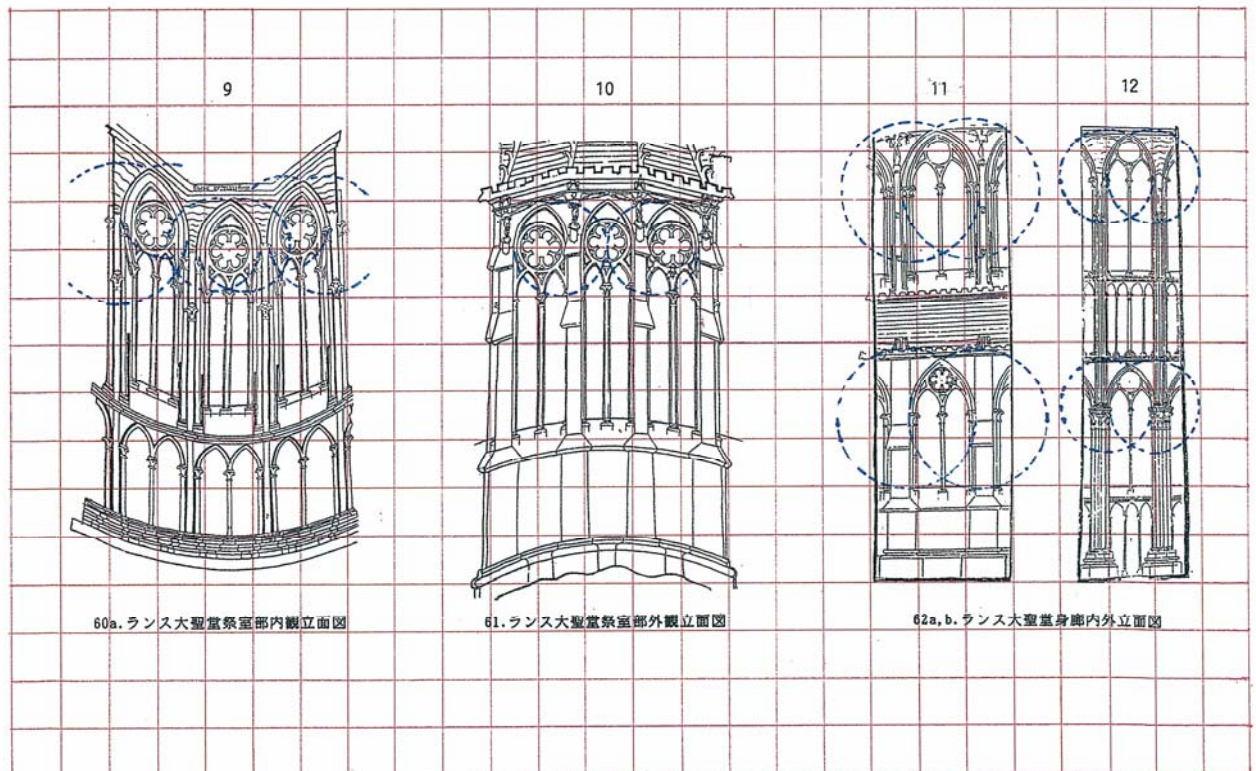


図2. 建築図面-その2

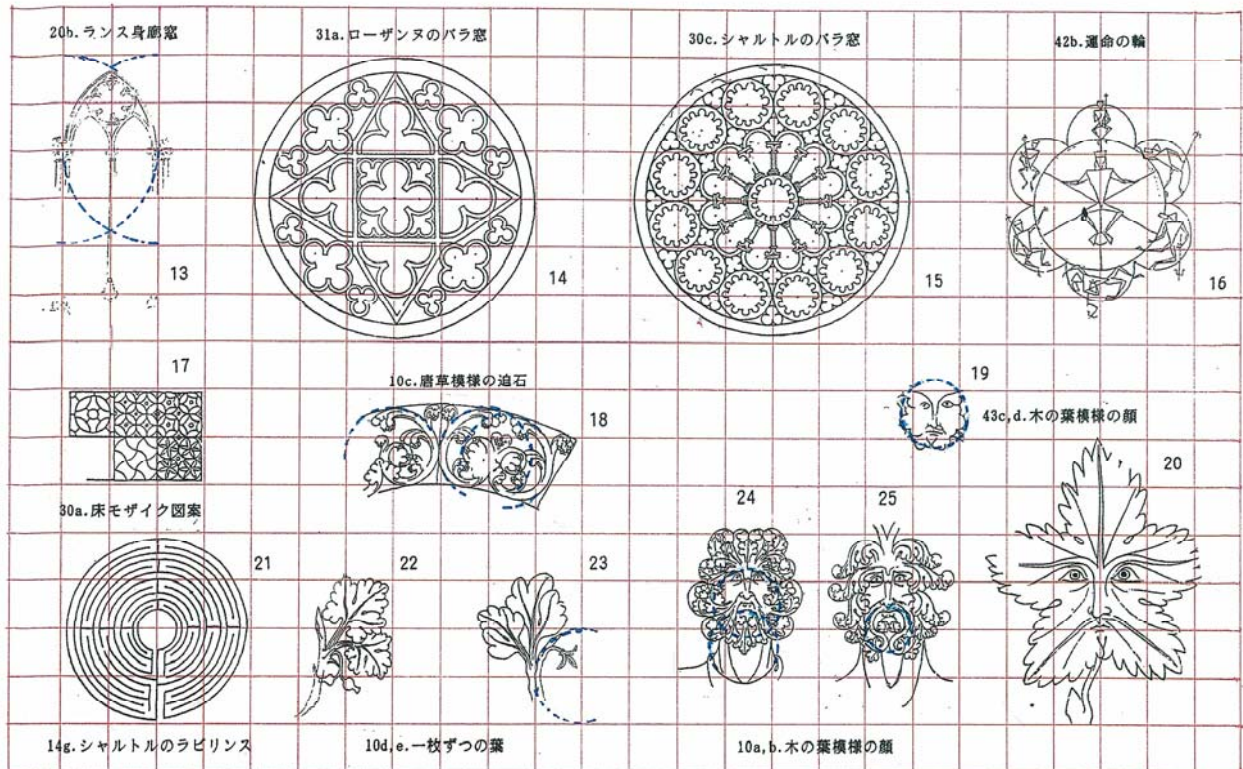


図3. 建築部分

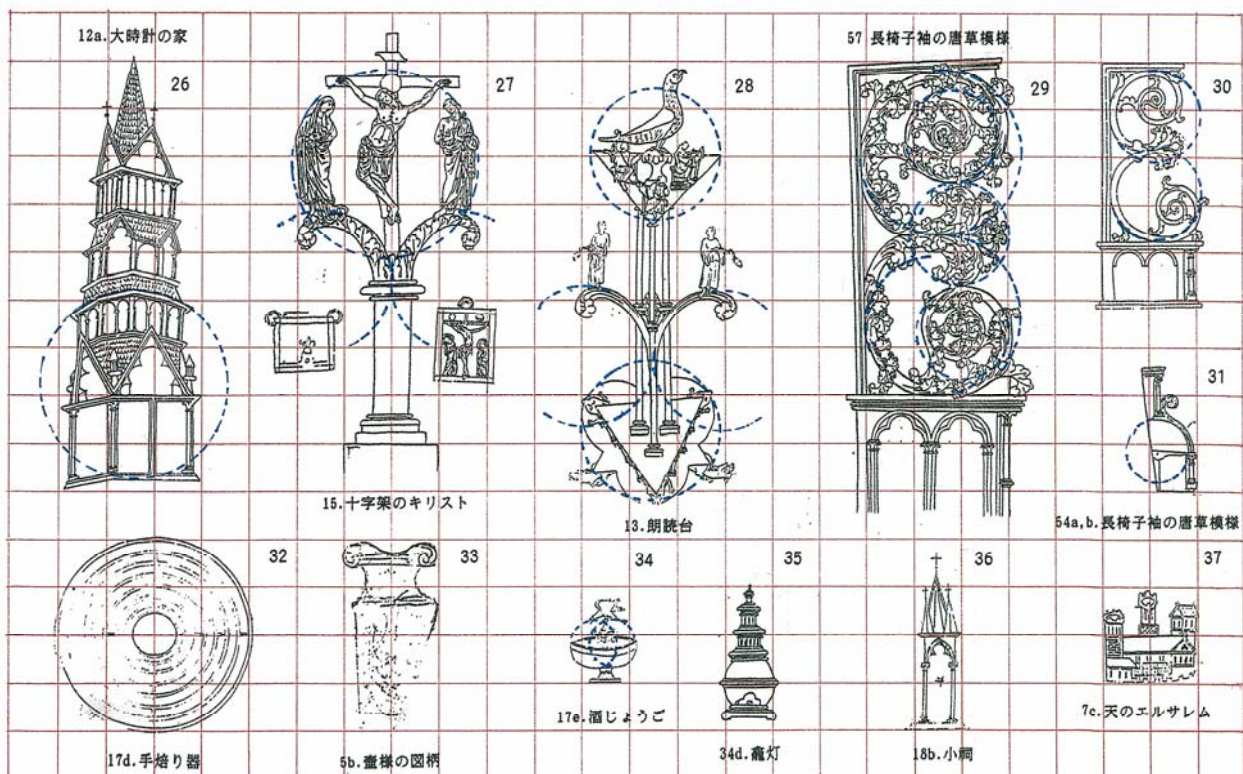


図4. 家具・道具

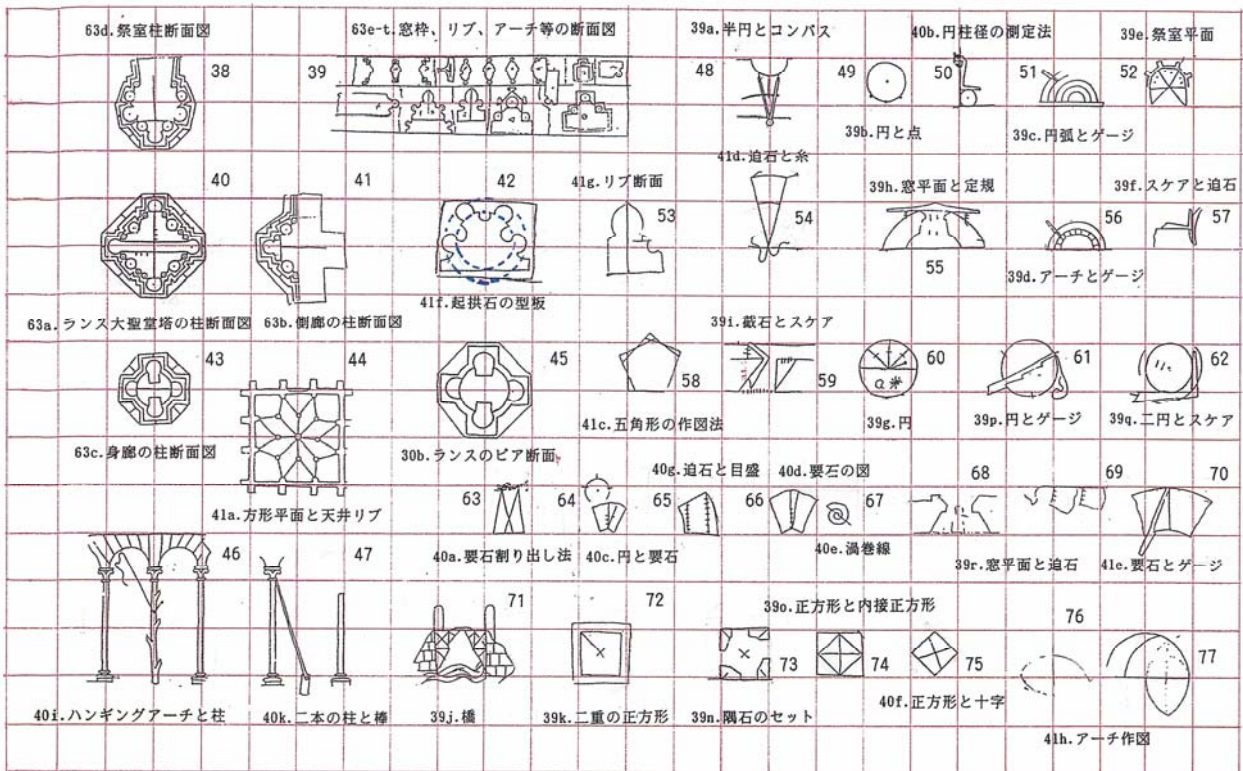


図5. 石工事

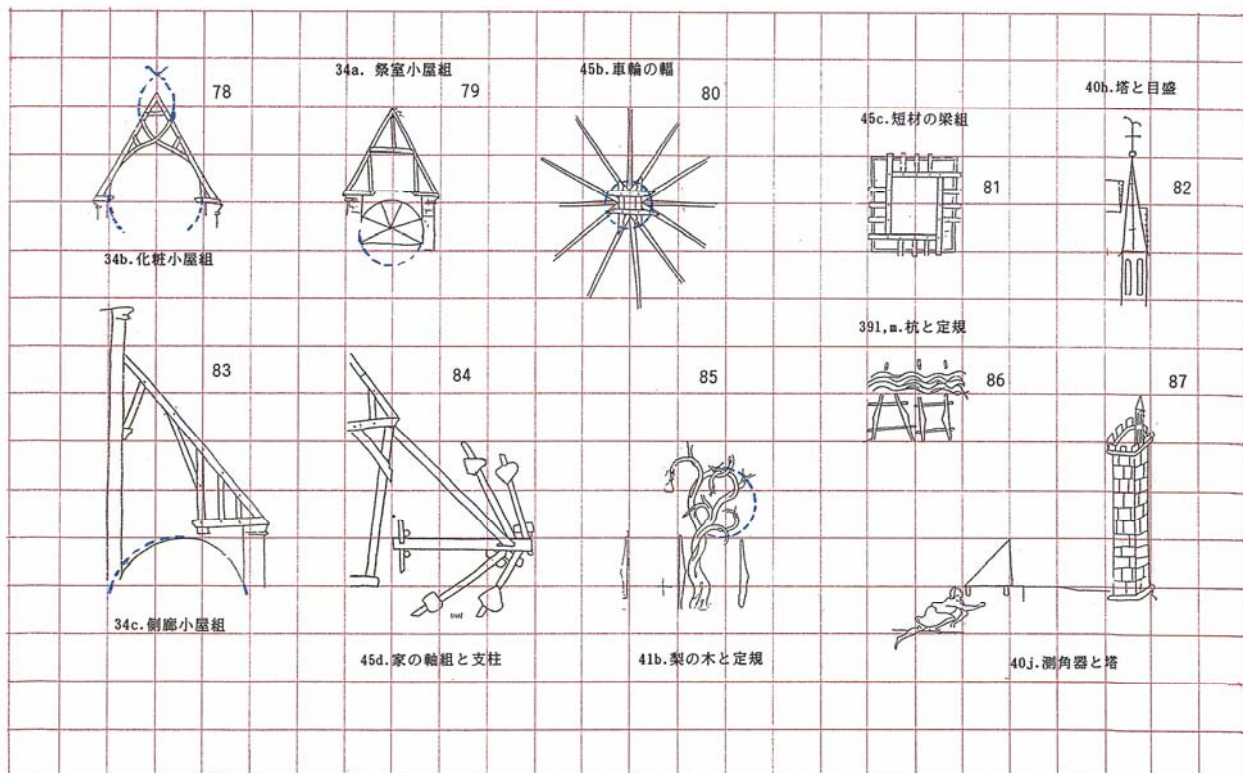


図6. 木工事

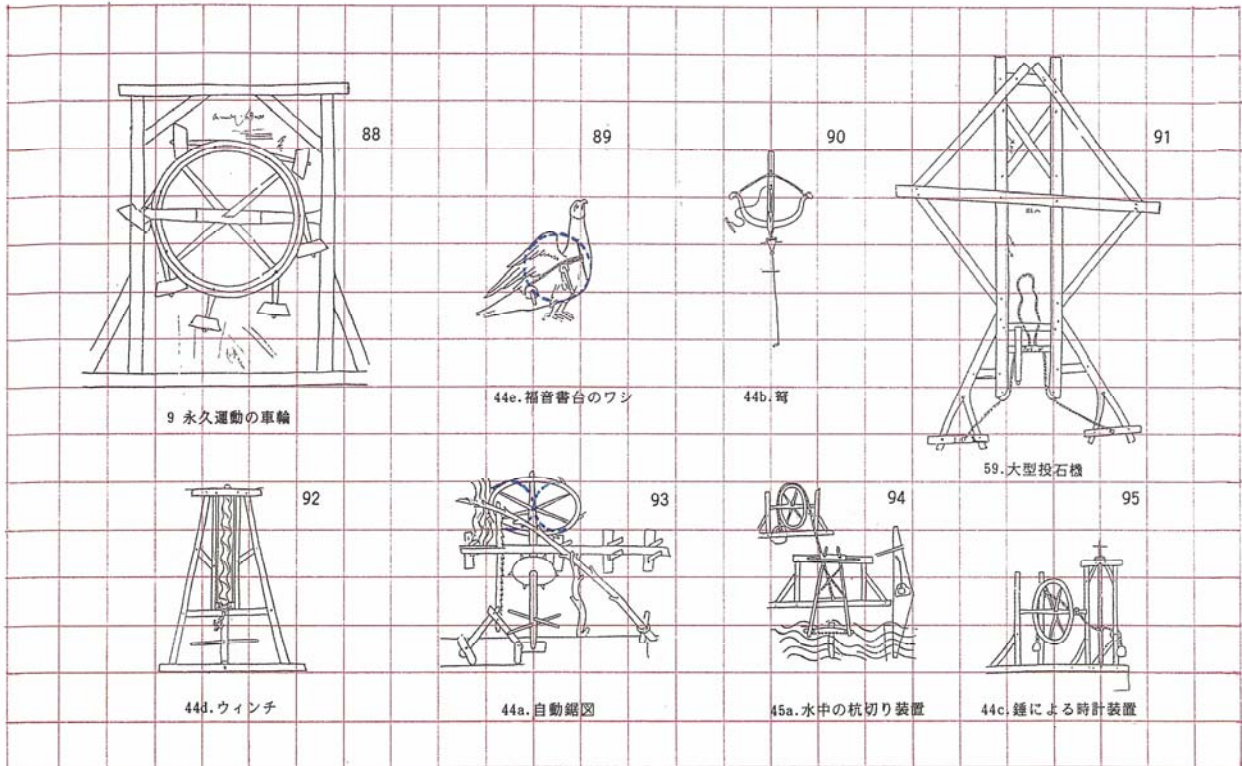


図7. 機械 (エンジン)

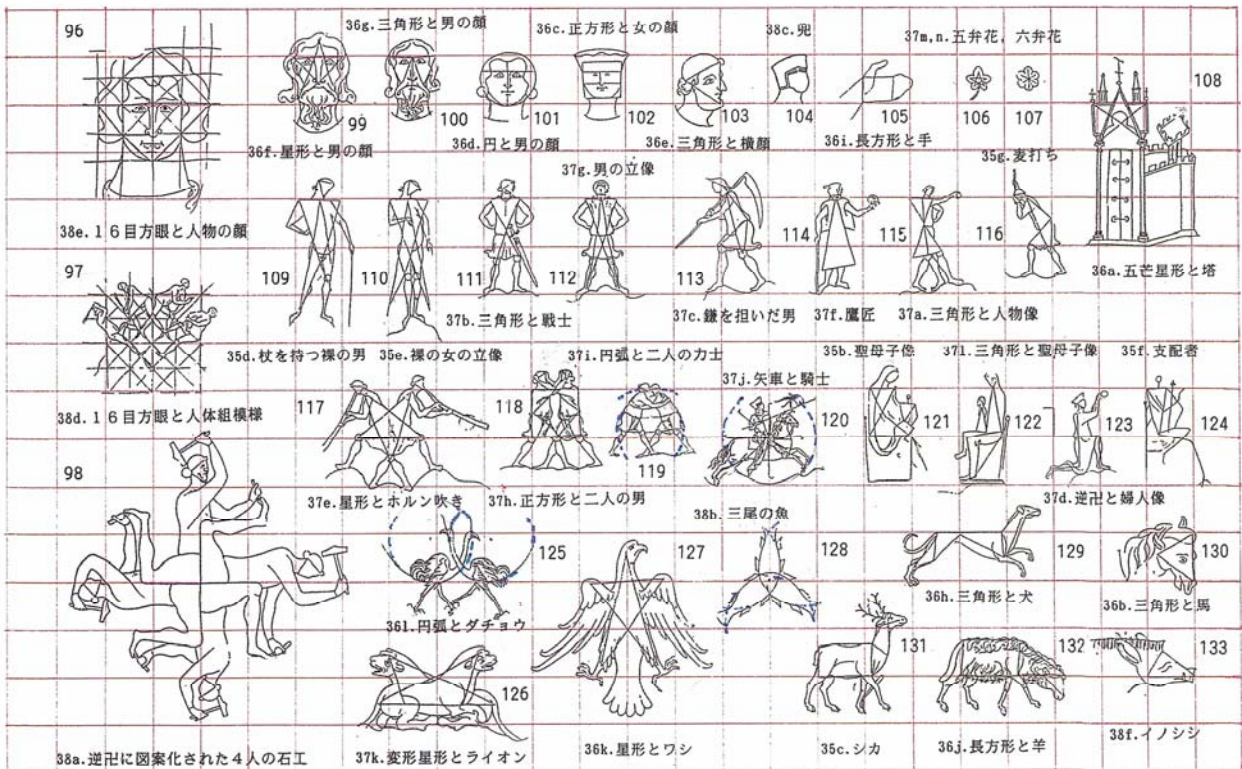


図8. ポルトレチュール



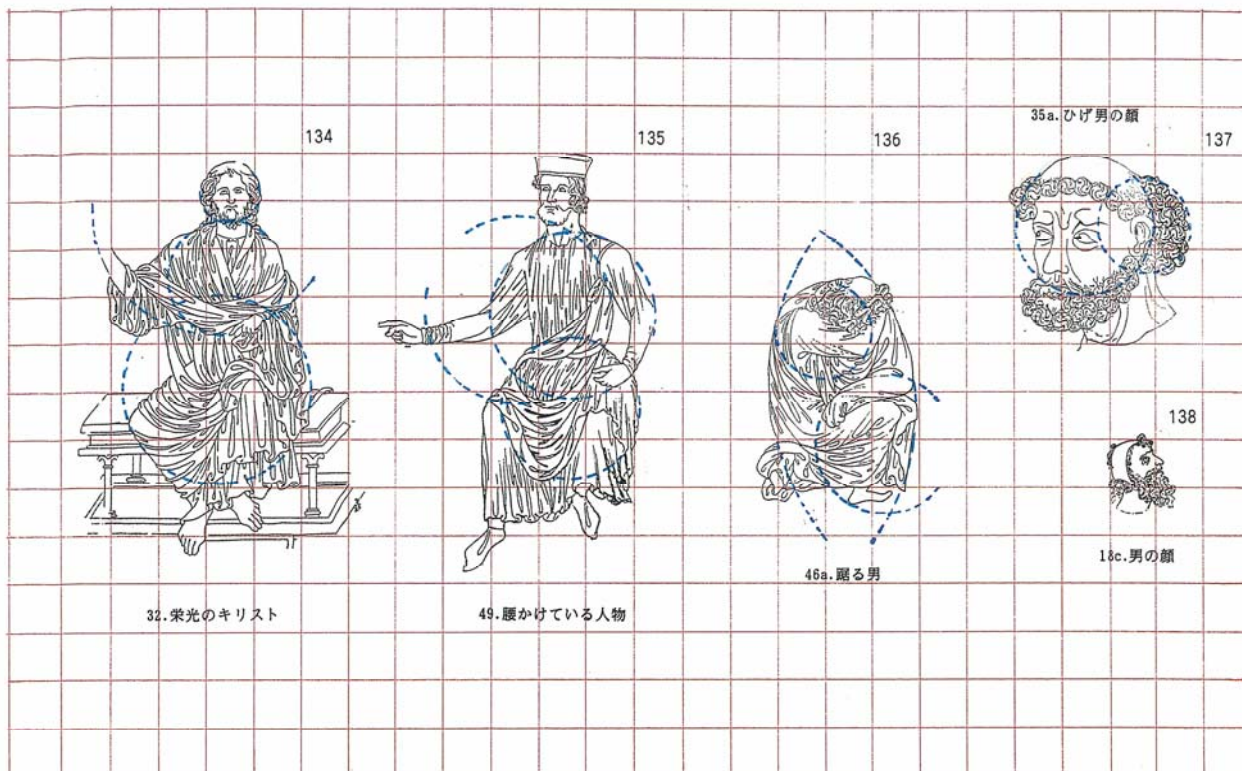


図9. 人物図-その1

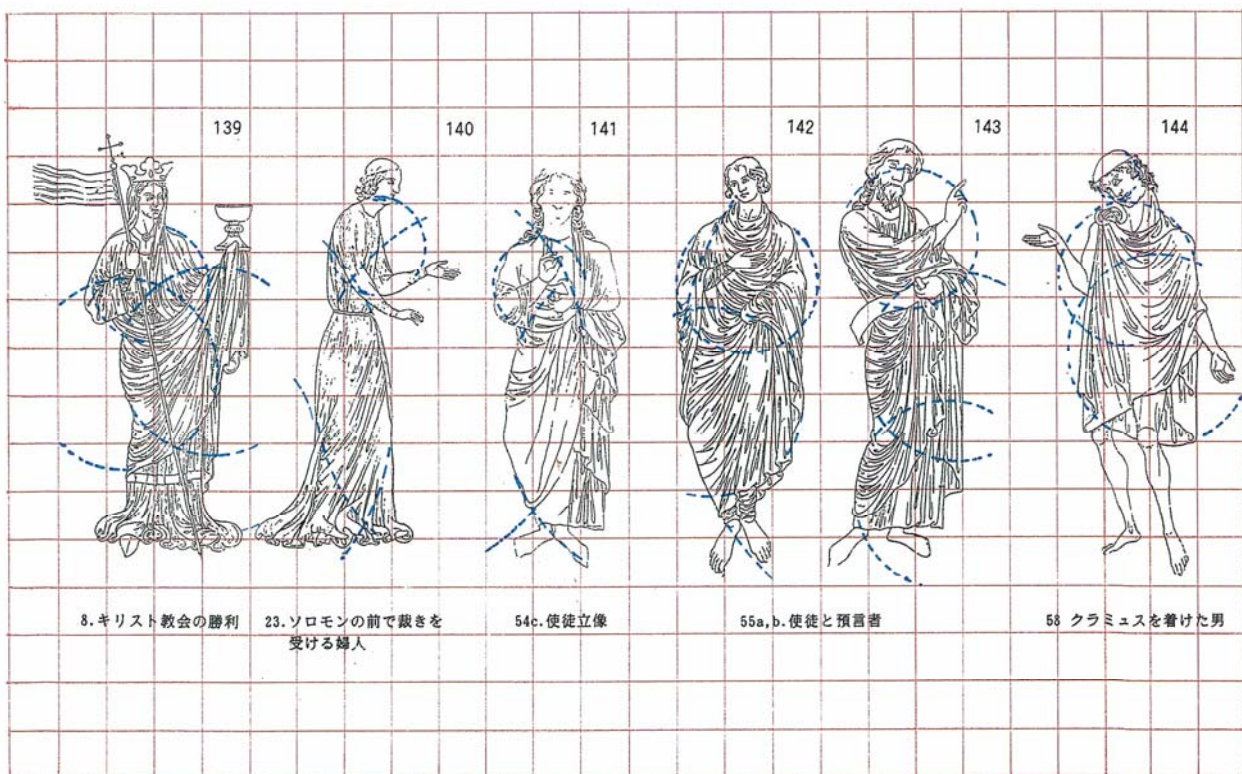


図10. 人物図-その2

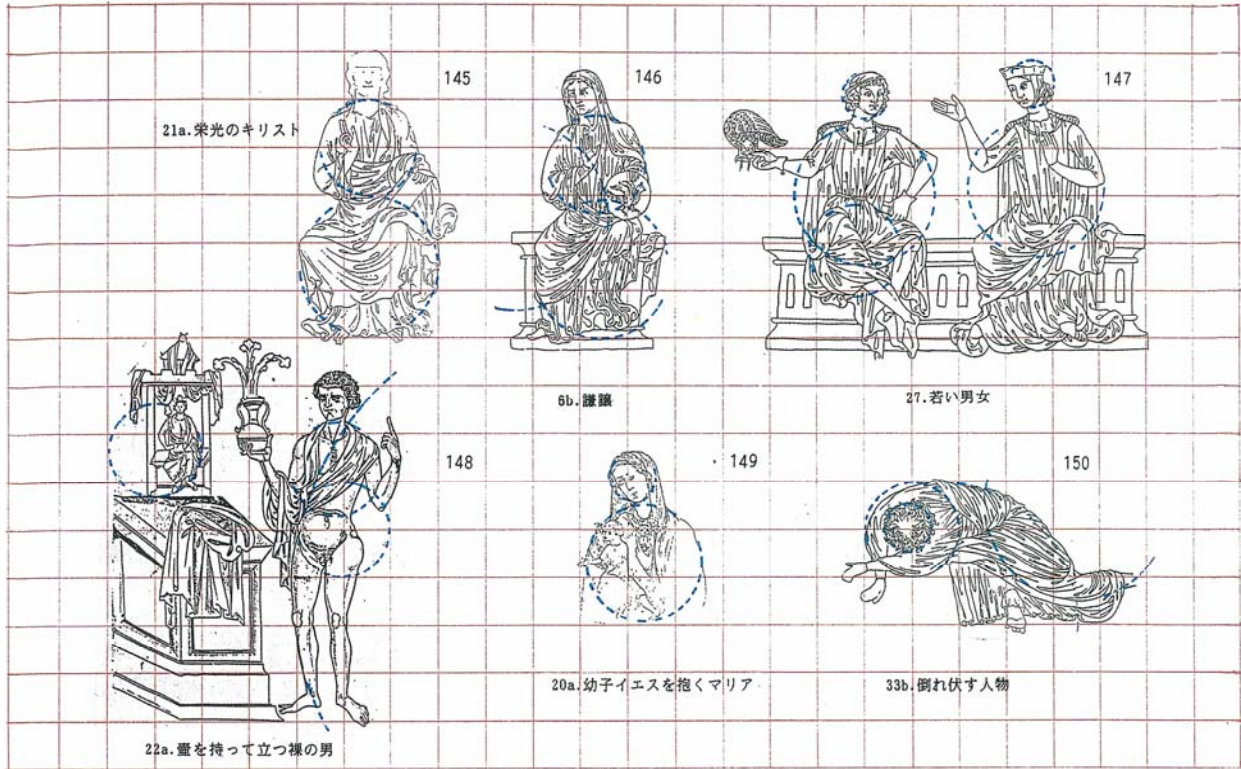


図11. 人物図—その3

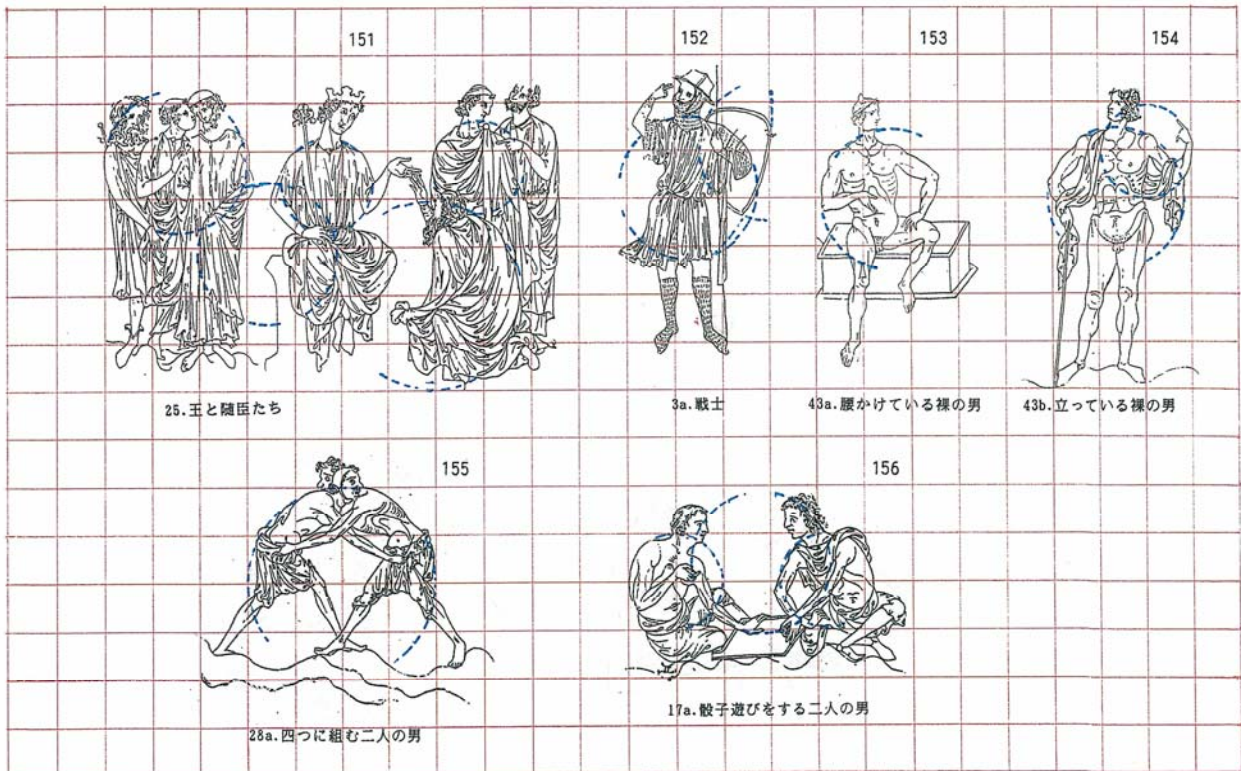


図12. 人物図—その4

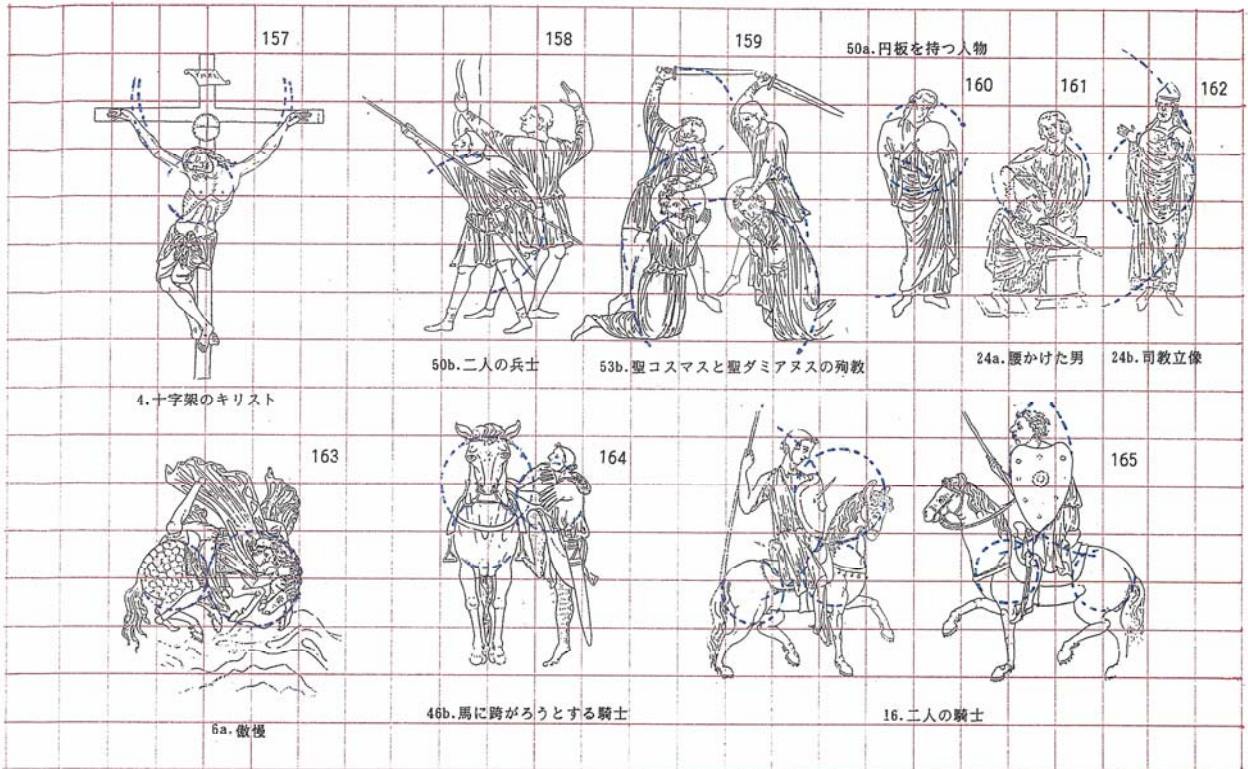


図13. 人物図-その5

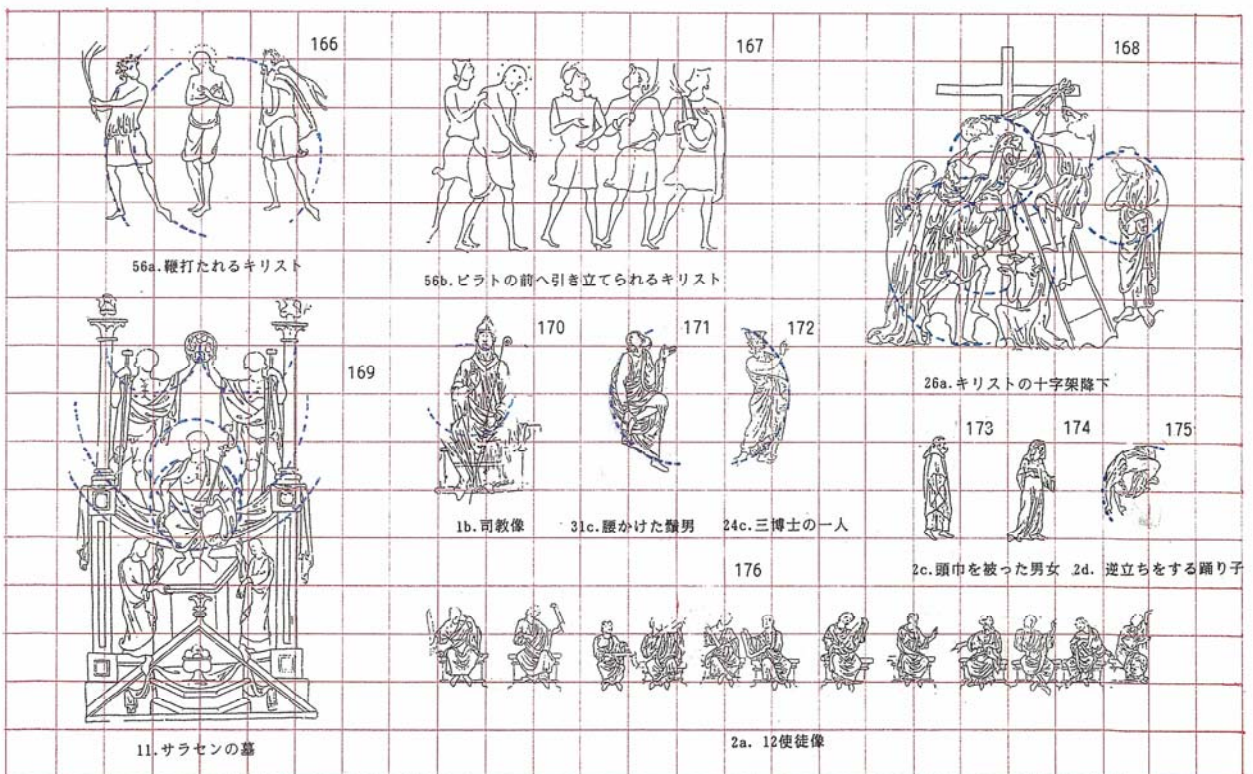


図14. 人物図-その6

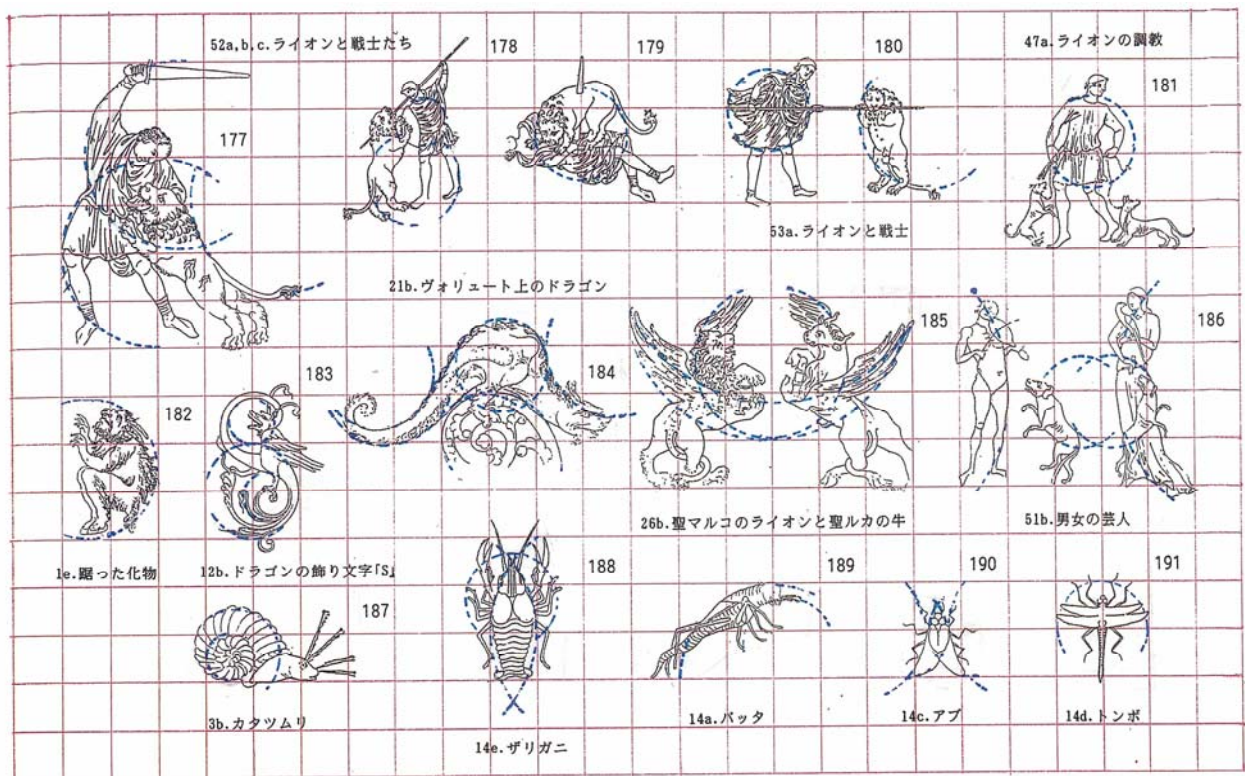


図15. 動物図-その1

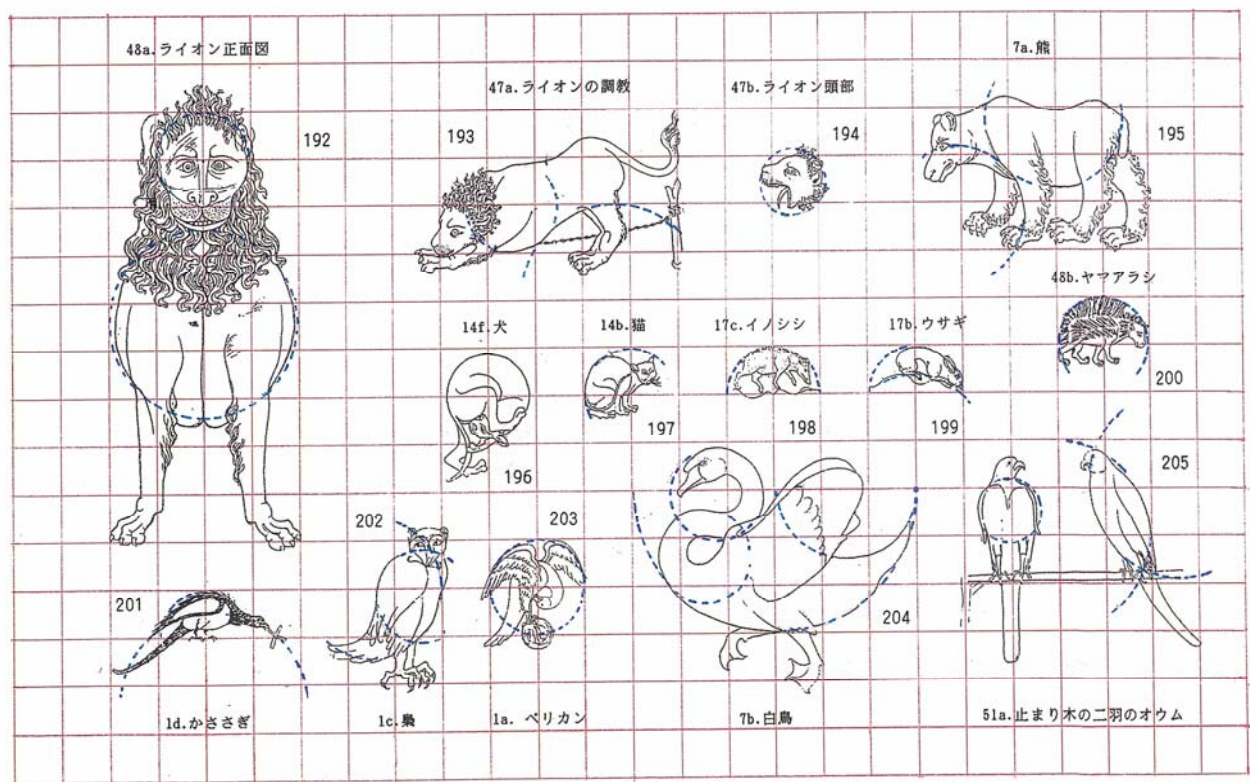


図16. 動物図-その2

の原理”のひとつがここにあったと考えられよう。

石工事・木工事などの一連の図柄の各部分や、ポルトレチュールの各図柄に見る基本的幾何学図形の寸法が、それぞれ基準の吋寸法によっているらしいことはこれまでも測定して来たが、これらを格子上に並べることで一目瞭然に認識可能となった。

こうしてヴィラルール・ド・オヌクールの画帖の全容把握と、各図柄の分別認識がいつそう容易となった。それと同時に作者のヴィラルールたちが相当明白な制作意図をもって、基準となる1ローマ吋格子を用い、あるいは少なくともこれを物差しで測り出して、図を描く根拠としていたらしいことが明らかになったといえよう。このことはヴィラルールたちが幾何学図形と尺度に依拠し、正確を縮尺理念をわきまえた極めて建築家的な態度をもっていたことを裏づけるもので、近年一部の美術史家により主張されてきたヴィラルール彫金師論等にも、再考の余地を促すものではないかと考える。

なお、筆者がここに試みた画帖内容図柄の分類配列は、あくまでも各図柄比較考察のための便宜的なものであって、本来的にヴィラルールの画帖の雑記帳的記載形態そのものが、ゴシック期建築関連諸技芸のあるがままのひとつの姿を留めていると見る点に<sup>(12)</sup>変りはないことを付記しておきたい。

の、古代ローマ都市レプシス・マグナの遺構に遺された2種類の尺度刻石図を解析した結果、上記 $\sqrt{3}/2$ 比を持つ関連尺度であることが判明した。実物寸法はなお不明であるが上記派生尺の関係を裏づけるものとしてよいであろう。

M.Wheeler : Roman Art and Architecture, London, 1964, 1991,p.54,III,33,34.

7. 拙著：「ヴィラルール・ド・オヌクールの画帖に関する研究」, 中央公論美術出版, 1991,p.187 ff.
8. M.M.Manion & V.F.Vines : Medieval and Renaissance Illuminated Manuscripts in Australian collections, Melbourne, 1984.
9. Bibliothèque Nationale : Byzance et la France Médiéval, Paris, 1958,p.21, PL. XVI.
10. S.コストフ著, 榎文彦監訳「建築家—職能の歴史」,p.16
11. S.コストフ著 : 前掲, p.89
12. 拙著：「ヴィラルール・ド・オヌクールの画帖」, SD選書 72,1972, pp.215—221.

注1. Le manuscrit conservé à la Bibliothèque nationale de Paris (n<sup>o</sup>.19093).

2. H.R.Hahnloser : Villard de Honnecourt. Kritische Gesamtausgabe des Bauhüttenbuches ms.fr.19093 der Pariser Nationalbibliothek, Wien, 1935,1972,pp.282—287.

3. J.—B.A.Lassus : Album de Villard de Honnecourt, architecte du XIII<sup>e</sup> siècle.Paris,1858,pp.57.

4. H.R.Hahnloser : op cit,pp.247—279.

5. T.Bowie : The Sketchbook of Villard de Honnecourt, Indiana University Press,1959.

6. カロリング尺 340mm はローマ尺 295mm と、正三角形の1辺と高さの関係 ( $295/340 \approx \sqrt{3}/2$ ) にあるので、両尺度を併用すれば、教会堂の平面や立面に三位一体の象徴としての正三角形を容易に含ませることができる。このことを筆者は従来主張してきたが、具体的な物差図の表示例を見ず、同時同所に異なる尺度の併用を訝る向きから必ずしも迎えられなかった。先頃 M. ウィラー著“古代ローマの美術と建築”(1991年) 所載